

2022年10月23日 収穫感謝礼拝(降誕前 第9主日礼拝)

メッセージ「神の業の現れるところ」

牛田匡牧師

聖書 使徒言行録 14章 8-18節

今回のお話は、パウロとバルナバが宣教旅行の最中に立ち寄ったリストラという町でのお話でした。その町にいた足の不自由な男が、二人によって癒されて、立ち上がり歩けるようになった。それを見た町の人々は驚いて、パウロとバルナバを、彼らが信じていたギリシアの神々の化身だと思った。そしてバルナバとパウロは、町の人々からいけにえを献げられそうになって、驚き慌てたという珍しいお話ですが、さて、このお話が私たちに伝えているメッセージは一体何でしょうか。

まず気になるのは9節にある「パウロは彼を見つめ、癒やされるのにふさわしい信仰があるのを認めた」という言葉です。これではまるでパウロが足の不自由な人を前にして、じっくりと眺めた上で「あなたには十分な信仰があるから、はい、合格。じゃあ癒しましょう」と判断したかのように読めてしまいます。ですが、果たして目の前の相手の信仰が、多いか少ないかなどということ判断することは出来るのでしょうか。そもそもイエス様に従った弟子たちでさえも、「あなたたちにはからし種一粒ほどの信仰もない」(マタイ 17:20)と言われていた程でした。そのことを思うと、「あなたは信仰が0.5mmだから不合格、あなたは1mmあるから合格」などという採点、合否判断が行われていたわけではなさそうですが、どうでしょうか。

この9節の言葉「癒やされるのにふさわしい信仰」は、直訳すると「救われたいという信心(信頼)」です。彼に「救われたいという信頼があったことが、パウロには伝わった」ということです。彼は「生まれつき足が悪かった」とありますので、現代の私たちは「先天性の障がい」と思って読みますが、その言葉の意味していることは、「生まれつきだから仕方がない、誰のせいでもない」ということではなく、むしろ逆に「生まれた時から、それこそ生まれる前から、罪の中にいる。神から見放された、穢れた存在」ということでした。

庶民は食べていくだけで必死という時代に、障がいをもって生まれて来た子どもが、親や家族から育ててもらえなかったということは、よくあったことと思います。また何とか命をつないで来たとしても、「あの子は呪われている、悪霊に憑りつかれ

ているから、足が不自由なんだ」と差別され続けたこととも思われます。その結果、病気や障がいを持った人々は、自分でも自身のことを「私は人前に出てはいけない、神様から見放された穢れた存在だ」と思い込まされ、差別を内面化してしまっていたのではないかと想像します。

そうすると、「救われたい」「ここから解放されたい」という思いすら沸いて来なくなってしまう、何もかもが「どうせ駄目だ」「何をしても無駄だ」となってしまいます。今年「全国水平社宣言」100周年の年ですが、あの宣言も、外から受け続けていた差別を自分たち自身が内面化して、もう諦めてしまっていた多くの被差別民たちに、「我々自身を誇り得る時が来た」「立ち上がれ」と訴えかけた宣言だったのだと思います。

このリストラの足の不自由な男は、パウロの話を聞きながら、「罪の中に生まれ落ち、日陰で暮らしてきたこんな私でも、救われていいんだ。『救われたい』と願っても構わないんだ。私も救われたい、今までの状態から抜け出し解放されたい」と心底願ったのではないのでしょうか。それは今までは諦めて絶望していた所から、彼自身の方向が180度方向転換して、希望に向かって「回心」した出来事でした。自分にはそのように希望を持つことが許されている。「自分は罪の中に産み落とされた命ではなく、生きることが許されている祝福された命なのだ」と気付いたこと、それはまさに彼にとって躍り上がって歩き出すくらいの、大きな「立ち上がり」の出来事に違いありませんでした。

今回のお話ではパウロは口にしていますが、福音書ではイエス様は、癒しの場面で、よく「あなたの信仰があなたを救った」(マタイ9:22 他)と言われました。それは「あなたの信仰が合格点に達したから、あなたは癒されましたよ」ということではありません。あなたが諦めてしまって「0」のままているのではなく、「立ち上がろう、立ち上がりたい、立ち上がりたいと願ってもいいんだ」ということを信頼して行動を起こすこと、それによってあなたは癒された、救われた、今までとは違う人生を歩み始めたのですよ、ということなのだと思います。ですから、ここでももちろんパウロが、特別な超能力を使って、足の不自由な男の人を癒したわけではなかったわけです。

しかし、リストラの人々は、その男の人の急激な変化を目の当たりにして、バルナバとパウロをゼウスとヘルメスの化身と思い込み、彼らの前に雄牛数頭と花輪を運んできて、いけにえを献げようとしてきました(12-13)。それで慌てて二人は人々

に対して「皆さん、なぜ、こんなことをするのですか。私たちも、あなたがたと同じ人間にすぎません」(15)と叫び、そして「あなたがたが、このような偶像を離れて、生ける神に立ち帰るように、私たちは福音を告げ知らせているのです」と言いました。

さて、ここで言われている「偶像」とは何でしょうか。一読すると、ギリシア神話のゼウスやヘルメスという他の宗教の神々のことかと思えます。しかし、パウロは手紙の中で「偶像崇拜」とは、「買春と不純な行動と貪欲」(エフェソ5:5 本田哲郎訳)と言っています。言い換えれば、何でも自分の思い通りにしようとする事、それが偶像崇拜だということでしょう。リストラの群衆たちは、足の不自由な人が生き活きと伸び上がって立ち上がったのを見て、「あの超能力で私たちも〇〇してもらいたい」と思ったのかもしれませんが。しかし、そんな偶像に向き合うのではなく、本当の生ける神に立ち返るように、とバルナバとパウロは訴えました。

では、その本当の生ける神とは、どんな方か。それは 15 節以降ですが、「天と地と海と、そこにあるすべてのものを造られた方」(15)、「恵みをくださり、天から雨を降らせて実りの季節を与え、あなたがたの心を食物と喜びとで満たしてくださっている」(17) 方です。これを聞くと、「そんなの当たり前」と思われるかもしれませんが、そんな「当たり前」こそが生きた神様の働きです。「神様の業が現れるところ」、それは何か特別な所で、特別な超能力として現れるのではなく、私たちの身近な所、「当たり前」の中に現れ、働かれるのではないのでしょうか。どうしてこの世界が生まれ、多くの命が生まれ、生きているのか。この地球が宇宙の太陽系の中で、今このように存在して、生命活動、社会活動が行われていること自体が、考えられないような奇跡です。地球の中だけでも、一つの命を取り上げても、突き詰めていくと奇跡や神秘としか言えないものの上には、成り立っていません。

私たちは何についても、点数をつけて判断することに、あまりにも慣れすぎてしまったように思います。「あなたは得点が何点、減点が何点、だから合格／不合格」……。教会でもそうです。礼拝にどれだけ出席しているから、献金をどれだけしているから、洗礼を受けているから……。だから、合格／不合格というのでしょうか。もしも、信仰に点数が付けられて、「何点以上が合格で、何点以下は不合格」というのであれば、ほとんどの人は不合格ではないのでしょうか。なぜなら、様々なことをお祈りしても、実際には叶わないことばかりなのではないかと思うからです。それを教会は、「お祈りが聞かれないのは、その願いが神様の御心ではないから、自

分都合の願いだからだ」と、教えて来たのではないかと思いますが、そもそも信仰に点数をつけて計ろうとしたり、自分の願いが叶いますようにとお祈りすること、それ自体が誤った考え方、それこそ「偶像崇拜」であり「カルト」なのだと思います。

どうしてこんな事故に遭うのか、病気になるのか、災害に見舞われるのか。どうしてこんなにも不幸ばかりが続くのか。それこそ祈っても祈っても、聞かれないことが多くありますし、神様に文句も言いたくなります。一つ一つの出来事の背景には、それこそ自分の生活習慣や、何十年前から続いている社会全体の環境破壊の故、という原因があるかもしれません。しかし、全く何も分からないまま遭遇する苦難や危機もあります。そのような時に、「どうして神様は私を助けてくれないのか。見捨てているのか。私の信仰、行いが足りないからか」と考えると、それは偶像崇拜、カルトの考え方であり、「じゃあ、〇〇すれば、神様は私を助け、私の願いをかなえて下さるはずだ」と考えるようになってしまいます。

イエス様が言われたように、「天の父(神)は、悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」(マタイ 5:45)方です。私たちの「何をしたかしていないか、何が出来たか出来ていないか」を遥かに超えて、大いなる恵みを下さっているのが、神様です。ですから、私たちがなすべきことは、自分や周りの人たちを眺めて、点数を付けたり比べたりすること、そしてそれによって神様の前に「私は信仰が足りません」と卑下したり、「私は神様から及第点を頂いている」と誇示したりすることではありません。この現実生活の中では、誰しにも、多くの困難や課題があります。それらと無縁でいることは出来ません。それでも、その中でも神様が共にいて下さることを信じて、自分は立ち上がることができ、生きていくことが許されている、救われていい命なんだということに信頼して、小さな一歩から行動を起こしていくこと、それが私たちのすべきことなのではないでしょうか。

今日は「収穫感謝」の礼拝です。農作物は人々の努力の成果、賜物でもありますが、同時に人々の努力を越えた天の恵みの賜物でもあります。収穫を前にたわわに実った稲穂や果物が、台風や大雨で収穫できなくなってしまうことも、珍しいことではありません。これらの豊かな秋の実り、大地の恵みを前にして、私たちは一人一人の中にあるカルト、偶像崇拜から解放されて自由になり、互いに分かち合い活かし合う命へと招かれて参ります。